

茅葺屋根も人が住む家となると、棟や軒先のフィニッシュには実用以上の職人の遊び心も入る。

棟の構造は複雑である。表屋根と裏屋根の合わせ目に向けて平屋根から少しづつ厚くしていき合体させる。さらに調整した茅を加えて棟の原形を作り、それを丸屋根状に整形する。丸屋根には割竹を平行にびつしり縫い付け、最上部には防水と装飾を兼ねて盆栽にもされる岩松を並べ、風で飛ばないように根元を縫い付ける。

棟と平屋根の境には段を付けるが、その切り口の仕上がり具合はその上に乗る棟全体とともに下から見上げた時の美的品質を左右するので、平屋根と平行に鋭く真つすぐ、と職人の腕の見せ所で、あそこからあそこまでは誰その仕事と後々まで比較されるので真剣勝負である。

「煙出し」の本体と棟の仕上げは、職人集団の腕と美的センスの集大成の看板であるから親方が自ら腕を奮う。同様に軒先の端面も、手が触れるほどの距離で丁寧に鑑賞される部分なので、なめるように仕上げられる。切妻の端面も美的センスに合った角度で斜めに刈り込まれる。

仕上がったばかりの茅葺屋根は、明るい黄褐色で日が当たると輝いて美しい。茅の鋭い切り口や棟を押さえる割竹や雨漏り防止の岩松の並びはほとんど芸術品である。

作業期間がどの位だったか記憶は無いが、屋根を剥がす所から数えて一ヶ月近くかかったのではないかと思う。

この時の屋根は、そのまま二十年余りの風雪に耐え、茅葺を継続できなくなった後もトタン板で覆うなどしてさらに二十年生き延びた。兄の代になって更地に戻して改築され、外観だけ古民家風であるが、構造や間取りは全く違う家になっている。

イングランドのコッツウォール地方のチップング・カムデンという村には観光用と思われる大きな葺葺屋根の家が並んでいる。その内の一軒の屋根は刈り込み方や、棟周りや軒先のフィニッシュに職人の遊び心が満ちていて、十五歳の春、下働き職人として参加したあの屋根替を思い出した。